義太夫協会会報
第105号
平成29年7月15日
一般社団法人 義太夫協会 発行
〒103-0023
東京都中央区日本橋本町3-1-6
日本橋永谷ビル210
Tel. 03(6265)1880
Fax. 03(6265)1881
http://www.gidayu.or.jp

清栄会さようなら公演をめぐって

義太夫協会会長　原道生

去る六月十九日の午後、「清栄会さようなら公演」という邦楽の演奏会が、国立小劇場で、盛会のうちに催されました。恐らく、本会報の読者の中にも、当日、会場におられた方もおいでだったのではないかと思われます。

この「清栄会」という団体は、昭和三八年に逝去された清元節三味線の名手であり、作曲もなさった人間国宝清元栄寿郎師の遺産を基金として、故人の御遺志を生かすべく、三味線音楽の普及・振興に資するための諸事業を、四十年以上にわたり行なってきた公益財団法人です。

そのような実績を持つ会が、なぜ今、「さようなら」なのかというと、これは当日の理事長の御挨拶にも述べられているように、長びくデフレの影響により、財団の資産運用に際して得られる利息が激減し、今後もこれまで通りの事業を継続して行こうとするならば、ご寄贈いただいた基本財産に手を付ける以外に道はなく、結果、いずれは消滅へと向かわざるを得なくなるという深刻な事態へと立ち至ってしまったことのために、まだ若干の余裕はある今の時点において正式に解散し、守ってきた基金はすべて日本芸術文化振興会が運営する芸術文化振興基金に寄付をするという決定を下したことによるものです。

ところで、私自身が、この「清栄会」に評議員や理事として関与することになったのは、ごく最近の約十年間に過ぎませんが、その間に行なわれた事業の中で、義太夫協会と縁の深かったものとしては、三味線音楽の伝承者及び研究者で将来を嘱望される中堅・若手に対してなされる「清栄会奨励賞」の贈呈と、広く一般の鑑賞者の開拓・啓発を意図した「初心者のための三味線音楽鑑賞会」の開催との二つをあげたいと思っています。

そのうち、前者は、特に会が重視していたもので、今回の「さようなら公演」でも、その第二部全体が、清元以外の諸流における、これまでの「受賞者を中心とする演奏会」に宛てられていましたが、そこでは、各分野ともに、かつてこの賞を贈られた人たちが、今ではそれぞれの流派の中核的存在となって活躍しているさまが如実にうかがわれて、本賞の果たしてきた役割の大きさが改めて感じ取られたことでした。ちなみに、その日の女流義太夫は、越孝・津賀寿・寛也・三寿々・津賀花さんたちの受賞者に、駒之助・綾之助・土佐子師匠のお三方が加わるという豪華な顔ぶれの『道行旅路の嫁入』で、そのすばらしい演奏が客席全体を魅了したことはいうまでもないでしょう。なお、この賞の研究者部門では、水野悠子さんが、女流義太夫研究の御労作により受賞しておられます。

また、もう一方の「鑑賞会」に関しては、越孝・寛也・津賀花さんたちの演奏に水野さんや私が解説を担当したことの他、竹本として葵太夫・翔也さんにも御出演いただいた時のことが強く印象に残っています。

ともあれ、今回の清栄会の解散によって、今後、本協会の正会員の皆さんから、この奨励賞を贈られる機会が失なわれてしまったということが、残念に思われてなりません。

はら　みちお　昭和十一年、東京都生まれ。東京大学大学院中退。横浜市立大学助教授、明治大学文学部教授を経て、同大学名誉教授。瑞宝中綬章受章、日本演劇学会河竹賞、角川源義賞〔文学研究部門〕受賞。

事務所移転
築地から日本橋へ

一般社団法人義太夫協会は、長年にわたり銀座・築地近辺に事務所を置いて参りましたが、六月十九日、左記に移転いたしました。これまで分散しておりました事務局機能と倉庫機能が一体となり、備品・資料の管理面でも従来より利便性が向上いたしました。

今回の移転では電話番号が変わりましたので、登録などのご変更をお願いいたします。

【新住所】
〒一〇三―〇〇二三　東京都中央区日本橋本町三―一―六　日本橋永谷ビル二一〇号

【新電話番号】
電話　〇三―六二六五―一八八〇
ＦＡＸ　〇三―六二六五―一八八一

【メールアドレス（変更なし）】
am-giday@gidayu.or.jp

平成二九年度
通常総会終了

一般社団法人義太夫協会の平成二九年度通常総会は、五月二八日（日）築地・東劇ビル十七階会議室にて開催され、定足数に達し総会は成立。左記の議案が承認されました。

○平成二八年度事業報告・収支決算
○平成二九年度事業計画・収支予算
○任期満了に伴う監事二名の選任

◆追悼　鶴澤友路師◆

鶴澤友路師匠の思い出

◇昨年十二月に友路師匠が亡くなられて早くも半年が過ぎました。しばらくはぼんやりしてただ時間だけが流れているようでした。こうして月日が経つにつれ、心の中にぽっかり穴があいたような、言いしれぬ寂しさを感じております。師匠の存在の大きさを今更ながら改めてかみしめております。

師匠の三味線は　自由自在に聞く人をその時代、その場面へいざないました。悲しい音色、特に「菅原伝授手習鑑」の「いろは送り」の弾き出しなどは、その部分を聞いただけで涙が出るほどでした。又、するどい所はするどく、勢いがあって、華があって、スパッとしているところが大好きでした。今思えば子供のころから側で師匠の三味線を長年、聞かせていただいた事は私にとってとても幸せなことでした。

師匠は淡路島でお生まれになり、幼い時から大阪へ修行に出られました。主に六世鶴澤友次郎師匠、六世鶴澤寛治師匠に師事されておりました。戦時中は友次郎師匠が淡路に疎開されており、側でたくさん稽古していただけた事をよくお話していただきました。又、友次郎師匠は「お茶を点てるのは友路に」とおっしゃって、友路師匠の点てたお茶がたいそうお気に入りだったそうです。

地元の高校、中学、小学校の指導、素人さんのお稽古、現在の淡路人形座と共に海外公演にもたくさん参加されています。中でもカーネギーホールでのスタンディングオベーションのことは本当に嬉しそうにお話していただきました。海外公演で思い出すのは、友路師匠はとてもショッピングがお好きで、目を離すと知らない間にいなくなって、弟子たちが慌てて探しまわるということがよくありました（笑）。

師匠の偉業は書き尽くすことはできませんが私共弟子への稽古も事細かにわかりやすく、とても熱心にしていただきました。最後になってしまったお稽古は「仮名手本忠臣蔵」四段目「塩谷判官切腹の段」でした。竹本友和嘉さんと私が毎年開催している「阿波路会」のお稽古です。亡くなる半年程前からお身体の具合があまりよくありませんでしたのでお稽古に伺うのをしばらく遠慮していると師匠から「稽古に来んとやれるのか、来なさい」と。他の連中さん達にも「あの子らにはちゃんと教えとかなあかん」と仰っていたそうでそれを聞いた私達は有難いやら、嬉しいやら師匠の身体は心配やらで複雑でしたが、お言葉に甘え、亡くなる一か月程前までお稽古していただきました。この芸に対する態度、心意気の本当に素晴らしい師匠でした。

「芸には人間性がでる、人間性を磨きなさい」と師匠はよくおっしゃっておりました。

師匠の教えを守り、人間性を磨き、精進することが恩返しだと思います。

「師匠、見ていてくださいね」

（鶴澤友勇）

◇友路師匠に初めてお会いしたのは、私が中学一年の時。当時君香というお名前でしたが、私の淡路島の実家の裏にお稽古にお見えになっており、そこに伺ったのが最初です。

それから昨年亡くなるまで、長きにわたるご縁となり、近しく身内のようにお付き合いをさせていただきました。細かいことにこだわらない大らかなお人柄のとおり、スケールの大きな芸をお持ちでいらっしゃいました。最後までご家族、お弟子さんのことを思い、また皆さんに見送られ、お幸せな人生だったと思います。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

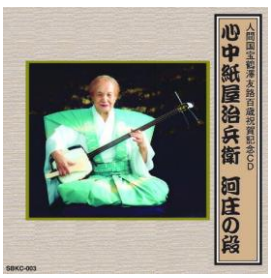
（竹本駒之助）

1983 年頃

鶴澤友路　つるざわともじ

本名　宮崎君子　みやざききみこ
生年月日　大正二年十二月九日
大正六年　野澤吉鳳・鶴澤徳八に師事、竹本君香と名のる
大正八年　洲本市公会堂にて初舞台
大正十一年　大阪の野澤吉童内弟子となる
大正十三年　吉童改め絃平となるに伴い、野澤絃君となる
昭和三年　淡路へ戻り、再度徳八に師事、鶴澤君香となる
昭和八年　竹本東廣・豊澤廣助に師事
昭和十一年　六世鶴澤友次郎の内弟子となる
昭和十六年　真打披露、鶴澤友路となる
昭和二三年　兵庫県知事賞、淡路文化賞
昭和二六年　鶴澤吉弥、六世鶴澤寛治に師事
昭和四九年　人形浄瑠璃因協会賞。一月より十四日間にわたりアメリカ各地を公演
昭和六十年　兵庫県文化賞
昭和六一年　重要無形文化財総合指定保持者認定
平成七年　文化庁長官表彰
平成八年　伝統文化ポーラ賞受賞
平成十年　重要無形文化財保持者認定（人間国宝）
平成一九年　旭日小綬章
平成二八年　十二月十三日没（満百三歳）

幼少の頃より師匠に恵まれ、戦前戦後を通じ芸道に精進し、淡路において芸一筋で活動してきた。郷土芸能の普及・啓蒙にも力を注ぎ、海外公演を通じ日本の人形浄瑠璃の紹介にも貢献している。淡路のみならず、大阪・東京の舞台で活躍する一方、指導者としても多くの後継者を培い、近年まで地元淡路の学校等で育成を行っていた。



人間国宝　鶴澤友路
百歳祝賀記念ＣＤ
「心中紙屋治兵衛
河庄の段」
竹本土佐廣／鶴澤友路
定価：2100 円（税込）
お申し込み・お問い合わせは義太夫協会まで

偲ぶ会 2017 年 1 月 28 日　©後藤剛

義太夫教室　六九期から七十期へ

義太夫教室第六九期は三月十一日（土）の卒業演奏会・ＯＢ演奏会（於・鳥越神社白鳥会館）を経て、三月二三日（木）に修了式を迎えました。演奏会では風邪で急遽欠席の人、集合時間を間違え開演直前に駆けつけた人、着付けに必要な物を忘れてしまった人と、例年になくトラブル続出！　ただ、三味線一番、語り二番の舞台は息の合った演奏で、応援に駆けつけた六八期の生徒さん達からも絶賛の声が聞かれました。既に個々のお稽古場で新たな一歩を踏み出された方、これからのスタートを計画されている方と、各々義太夫熱は衰えていない様子。

五月二七日（土）には新たな期が始まりました。今年は第七十期と節目の年に当たるため、来年三月十日（土）の卒業演奏会に合わせ、記念誌の発行を準備中です。卒業生の皆様には、ご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

研修部よりご報告

本協会では、昨年より新人養成のための特別研修を始め、現在女性二名が研修中です。

一人目は、書類審査、面接を経て、昨年六月より語り、九月より三味線の研修を終え、本年三月に面談の上、三味線を専攻することとなり、四月より専攻の研修が始まっております。二人目は、本年三月に書類審査、面接を経て、五月より語りの研修に入りました。

引き続き、随時応募を受け付けております。周りにご興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひお勧めください。

第三八回松尾芸能賞

鶴澤津賀花が、新人賞を受賞しました。当正会員では、三年前の竹本朝輝の特別賞以来の受賞です。三月二九日、帝国ホテルで行われた授賞式に臨みました。

初舞台から十六年経つとのことですが、「良き師匠とのご縁に心から感謝をし、これからも初心を忘れず、たゆまぬ努力と精進を重ねてまいりたい」という津賀花。

これを機に更なる飛躍が期待されます。

二九年春の叙勲

竹本土佐恵が、旭日双光章を受章し、五月十二日に国立劇場で執り行われた伝達式に出席しました。終了後、ご主人と皇居へ参内、豊明殿で他の受章者と共に、天皇陛下に拝謁する栄誉に浴しました。

日頃から人一倍健康に留意しているという土佐恵。天皇陛下からお祝いとねぎらいのお言葉をかけて頂いた中で、「体に気をつけて」というご慈愛に満ちたお言葉が、特に胸に染み入ったそうです。秋に第十回土佐恵の会を予定しており、日々体に気をつけて、長く舞台をつとめられるようにしたいとのことです。

今後の益々のご活躍とご健康をお祈りしています。

二ヶ月連続企画
「あの人も義太夫を聴いた 書き残された女流義太夫」

水野 悠子

五月・六月の女流義太夫公演で、私は前座を務めさせて頂きました。六月は竹本駒之助師のまさかの病気欠演に、百人を越す御客様も楽屋も大変に心配したのですが、順調に回復されているとのことで、ひとまずは安堵いたしました。（代演は四代目竹本綾之助師）

「あの人」を誰にするか、「花の昇菊昇之助」とうたった木下杢太郎、竹本小土佐がモデルとされる小説を書いた高浜虚子も有力候補でしたが、何と言っても有名な夏目漱石、正岡子規、樋口一葉、石川啄木、北原白秋、志賀直哉に絞ることにいたしました。詩歌や短歌、手紙、日記などを御紹介しましたが、いかがでしたでしょうか。演目が太十、酒屋、寺子屋、柳、鳴門、野崎と定番中の定番になったのは、今も昔も愛好される作品に変わりがないことの証といえましょう。

ある方から、水野の話も「書き残して」おいた方がいいとの助言を頂き、もう一頑張りしてみようかと思い始めたところです。

◆五月公演余話　―二人の原先生―

私事で恐縮ですが、近況報告のつもりで大学の恩師に公演のご案内をお送りしたところ、何と五月公演にお越し下さるとのこと。有難いと同時に、申し訳なさと緊張でいっぱいだったのですが、公演当日、嬉しいことがありました。

わが恩師・原誠先生が、ある大学で講座をお持ちだった時、義太夫協会会長である原道生先生もその大学にお勤めでした。専門分野が全く異なるお二人の原先生は、すれ違うことすらなかったそうですが、事務の手違いから、郵便物の中身が入れ違いに届くという出来事があり、それ以来、お二人は年賀状を交換していらっしゃるそうなのです。

ということは、五月公演が原先生お二人の初めての出会いとなるかもしれません。けれども、開口一番で舞台に出なくてはならない私は、開演前にお引き合わせすることが出来ません。恩師来場のことは、協会事務局にも伝え、原会長も承知されてはいましたが、何しろお二人は顔が判らないのです。

三十分の話を終え、客席に回ってみて驚きました。お二人が肩を並べて聴いていらっしゃるではありませんか！　原会長が受付で恩師を出迎えて下さったのだそうです。

終演後、お二人の原先生と私は、近くの蕎麦屋に立ち寄り、板わさでちょいと一杯、初対面とは思えないほど会話が弾み、ラストオーダーに。クラシック音楽一辺倒だったという恩師は、三味線奏者が全く譜面らしきものを見ないことに心底驚かれ、凄いなぁ、凄いなぁと感嘆しきりでした。会長とお別れした後、日本橋から銀座一丁目まで健脚の恩師のお供をして、私の心は、無事仲介役が果たせた満足感と幸せ感で満ち満ちていたのでした。

◆お客様の感想

女流義太夫演奏会　五月公演・六月公演は「書き残された女流義太夫」と題して女流義太夫が人気を博していた明治～昭和にかけての文人が女流義太夫について書き残した文献について水野悠子先生のお話がございました。五月は夏目漱石・樋口一葉・正岡子規、そして六月は北原白秋・志賀直哉・石川啄木といった文豪の名前が並びました。

従来の義太夫演奏会でのお話は作品論や演者のお話がメインでしたが、今回は聴く側、客席に焦点を当てた内容が新鮮でした。子規が義太夫席に通い詰める話、あるいは志賀直哉の昇之助の追っかけっぷりなど、格調高い文章で書いてはいても、今のアイドルのおっかけと根の所は変わらないな、と思ったり。

お芝居や義太夫のご通家、そしてＳＰレコードのコレクションでおなじみの関川勝夫さんにお話を伺うと、

「大変良かったですね。ただ聞いて帰る、ってんじゃなくて、たまにこういうお話があるとね。知ることも重要ですね。大きいものに取り組むのも大事ですけど、今回は出し物も彼らが聴いた、っていう視点で選ばれていて良い選曲で、ポピュラーなものも大事ですよ。客席あっての芸ですから」。

また、この両月は先生のお話に感化されたのか、客席から「たっぷり！」など良く声がかかりました。この掛け声についても

「大衆芸能ってのは鑑賞ばかりじゃなくてこうして客席からも参加して楽しむもんですよ」

と関川さん。とのことで企画ともどもご満足のご様子でした。

（森江宏太）

第一回「瑠璃の会」開催

新緑が芽吹き始める季節、四月二二日（土）に、御霊文楽ゆかりの地である御霊神社（淀屋橋）において、関西では八年ぶりの定期公演復活となる「女流義太夫　瑠璃の会」を開催させていただきました。この会は、因協会解散以後、関西の女流義太夫演奏家の活動の場が著しく減少している状況を打開しようと、竹本土佐恵の発案、企画により実現いたしました。

第一回の内容は、土佐恵のご挨拶に始まり、「鎌倉三代記　三浦之助母別れの段」を、竹本住蝶・豊澤住輔、「碁太平記白石噺　新吉原揚屋の段」を、竹本土佐恵・鶴澤駒清で演奏させていただきました。

どのくらいお客様が来てくださるのだろうかと、当日まで心配しておりましたが、ふたを開ければ会場いっぱいのお客様で、本当に有難いと同時に、やはりこの地には義太夫節が根付いているのだと実感いたしました。

来年は三月三日（国立文楽劇場小ホール）の開催を予定しております。少しずつ輪を広げ、内容にも工夫を凝らして、末永く続けていきたいと思っております。

今後とも「瑠璃の会」を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（鶴澤駒清）

「とくしま文化芸術奨励賞」を受賞して

二月末、徳島県文化振興財団から「とくしま文化芸術奨励賞」受賞の知らせが届きました。昨年十二月十三日に鶴澤友路師匠が御逝去され、悲しみと師匠がお亡くなりになった喪失感で、その時から時間が止まってしまった様な、抜け殻の様な日々を過ごしていたところへの思いがけない知らせでした。嬉しいという気持ちより、それはまさに、「しっかりせい！」と師匠の声がして、ハッと目が覚めた瞬間でした。決して妥協は許さず「一生勉強」という芸への姿勢を最期まで、身を以て教えて頂きながら、悲しみに逃げていた未熟な私は、もっともっと勉強していかないといけないと気付かせて頂いた、とても有難い賞になりました。

阿波人形浄瑠璃の歴史は古く、昭和初期には、七十二座の人形座があり、昭和三十七年の人形浄瑠璃公演は十八日間、百三十一段が語られ、太夫は百四十二人に上ったとの記録が残っています。年代と共に、衰退してきていますが、先人の方々が培われ、受け継がれてきた伝統芸能です。

これまで、お導き下さった友路師匠をはじめ、今まで支えて下さった方々への感謝の心を忘れず、郷里の文化の発展に少しでもお役に立つことが出来る様、より一層精進して参りたいと思っています。

（竹本友和嘉）

若い力―ＫＡＡＴ「続・新説西遊記」

神奈川芸術劇場ＫＡＡＴでは、これまでに通算八回、駒之助師匠の会を主催して下さっていますが、同じプロデューサーさんによる、若手舞踊公演ＳＵＧＡＴＡ「続・新説西遊記」に京之助と一緒に出演させていただきました。

年齢的に過渡期にある歌舞伎俳優さんに機会を与え、その姿をお客様とともに見守る、という趣旨の公演。舞踊公演とは言いながら、完全に新作歌舞伎なので、歌舞伎に慣れない我々は不安でいっぱいでしたが、役者さんと息をあわせたり盛り上がったり…刺激的で楽しい毎日でした。

作・演出・振付は藤間勘十郎師。師は、振付や舞踊家、演出家であるのみならず、三味線音楽に精通し方が半端なく、下座音楽はすべて師の作曲、弾き語りの見本で長唄さんが演奏されています。義太夫も作って下さい、と申しましたが「義太夫は苦手」だそうで、師のイメージで作らせていただきました。

主役は、故富十郎丈のご子息鷹之資くん、松江丈のご子息玉太郎くん、梅玉丈の部屋子、梅丸くん。

はじめの台本から大幅に義太夫が増え、しかも鷹之資くんは、糸にノル部分が稽古場で急にできたりして「義太夫を勉強しなければ、と思っていたので、ありがたいです」と真摯に立ち向かって下さいました。

若いということは、こういうことかな、と思いましたが、日に日に成長していく皆さん

の姿を見て、私も、お父様を思い出して涙ぐんだり、感心したり、感動の毎日でした。

（鶴澤津賀寿）

NPO法人 ハーモニーオブジャパン
「日本の伝統芸能 リトアニア特別公演」

五月十六、十八日の二日間、リトアニア共和国におきまして、ＮＰＯ法人ハーモニーオブジャパン（代表：藤間貴雅）文化庁国際芸術交流支援事業「日本の伝統芸能公演」が行われました。「三番叟」と創作「一休と義政」（舞踊：花柳寿楽、藤間貴雅他）に、竹本京之助、鶴澤津賀花が参加いたしました。十六日は郊外の近代的なアリートス劇場、十八日は首都ヴィリニュスにある、一五七〇年創立のヴィリニュス大学ホールでの公演でした。初めて日本の伝統芸能に触れるお客様から、予想以上の拍手喝采をいただき、演者一同、胸を熱くしました。

リトアニア共和国はバルト三国の一番南にあり、ロシアから独立して二五年になります。第二次世界大戦中、リトアニアに赴任した外交官の杉原千畝が、ユダヤ難民六千人に対して「命のビザ」を発給し、多くの命を救ったことから、今もリトアニア市民の中には親日家が大変多く、近年ジャパンブームも起きつつあります。日本とご縁の深いリトアニアでの公演に参加させていただいたことはとても嬉しく、これから益々、両国の交流が盛んになることを願ってやみません。（鶴澤津賀花）

清栄会主催
「清栄会さようなら公演」

清栄会事務局長　上杉　幸雄

六月十九日(月)国立劇場小劇場において、清栄会主催「清栄会さようなら公演」が開催されました。浄瑠璃の六つのジャンルが勢揃いし、女流義太夫は「道行旅路の嫁入」を駒之助師匠はじめ四挺四枚で演奏しました。

清栄会は、昭和三八年に亡くなった清元節三味線の人間国宝・清元栄寿郎の遺産で設立された公益財団法人で、三味線音楽の普及振興のための事業を行ってきました。その中心が清栄会奨励賞の贈賞で、三味線音楽に携わる中堅・若手の伝承者を顕彰し、昭和六十二年度から平成二十八年度まで三十回を数えました。女流義太夫では受賞順に悠美、越孝、津賀寿、寛也、三寿々、津賀花の六名が受賞されました。

義太夫節は心情や情景を細やかに、時に激しく表現しますが、素浄瑠璃の女流義太夫は女性特有の情味に溢れ、今回も感動を呼ぶ見事な演奏でした。

清栄会は今夏解散いたします。長年のご支援に感謝申し上げます。

女流義太夫公演記録のデータ化

田村 進一

私は平成十六年に入会した賛助会員の田村です。今回義太夫協会に保存されていた、女流義太夫演奏会の資料を整理しましたが、そのいきさつ等をお話ししたいと思います。

定年で仕事を退職し、暇であったので、ちょくちょく義太夫協会事務局に顔を出していました。

あるとき事務局の人から、「協会に未整理のカセットテープがあるので、整理してもらえないか」と相談されました。了解してテープを聞き、内容を把握しようとしていましたが、テープの中には女義の公演も含まれており、公演を調べる必要が出てきました。

事務局の人に、「公演記録はありませんか」と尋ねると、「パンフレットなら昭和三五年からそろっていますが、電子データは一部しかありません」とのことでした。

そこで電子データ化されていない資料は、週に一回程度、約二か月間事務局に通い、パンフレットを撮影し、家に帰ってパソコンに画像を落とし、それを文字入力するという作業を行い、その結果、すべての記録がエクセルで電子データ化できました。

全演奏曲数は約五千二百曲で、演奏回数の多い上位三曲は、「絵本太功記　尼ヶ崎の段」（二三一回）、「生写朝顔話　宿屋の段」（二二三回）、「傾城恋飛脚　新口村の段」（二二〇回）です。ぜひご活用ください。

ほんに気がメ～りヤス

（十八杯目）

先日、ＮＨＫの『落語　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ』（落語をあえて実写化する番組）の中で、その収録の様子というのをやっておりまして、録音された噺家さんの台詞に合わせて（おそらくは口パクで）芝居をするのですが、とにかくそのスピードが速くて、俳優さんがついていくのが大変だ…というのを興味深く観ておりました。

と同時に、話芸というのは、とても映像的なんだな、とも感じました。この番組を白黒にしたら、活弁付きの無声映画みたいになりそうだな、と。

というのも、落語を題材にした歌舞伎は結構ありますが、それはあくまで『歌舞伎化された落語』つまり、移行されるプラットフォームに最適化されているわけで（用語の使い方が間違ってないか心配です）極端な話、噺家さんが床に座って口演するのに合わせて俳優さんが芝居をするわけではないからです。

これはもしかしたら、三百年位前の歌舞伎の舞台で、人形浄瑠璃から移行された演目を演じる俳優さんがされた苦労～生身の人間が演ずるために作られたものではない脚本及び演奏に合わせて芝居をする～とよく似ているのではないでしょうか？

ここで押さえておきたい気づきというか、発見は「登場人物をありありと描き出す話芸の（とても映像的な）テンポ感と、同様に苦心される俳優さんの演技のそれは必ずしも同じではない」が、「昨今の映像技術の発達に慣れた感性は、自然と映像的なテンポ感を俳優さんの演技にも求める」のではないか、ということです。

以上の文章の「話芸」を「本行」、「俳優さんの演技」を「歌舞伎」に置き換えて考えますと、本行と芝居（俳優さんの演技）とのテンポ感の違いに折り合いをつけ、効果的な演出を生み出してきたのが、すなわち歌舞伎の義太夫狂言において、この三百年の間に積み重ねられてきた歴史といえるかと思います。が、技術の発達によって変化する感性は、特に新作歌舞伎を作り上げる過程において、これまでの古典の中で培われた方法の内、その感性にそぐわないものをそぎ落としていきます。

一方で、自分達の先輩のそのまた先輩位の、記録に残る芸を見聞きするときの、何とも言えない安心感、安定感、充実感…

日本のよいところは、大きな時代の変化を経ても、昔から続くものは、割とそのままの形で残っていることだと思うのですが、「現代の映像的なテンポ感」と「先輩方の芸に感じる感動」の両方を満たす芸をできた時に、百年後、二百年後に残るものができるのではないか、と頭では分かっております…おります、が、身体がついていっておりません。

生演奏だけに撥パクというわけには参りませんので（笑）。

（鶴澤慎治）

■協会・正会員の主な動き■

平成二九年一月～六月

【公演】

義太夫協会／義太夫節保存会主催公演

「女流義太夫演奏会」
一月二十日（金）お江戸日本橋亭
二月二十日（月）お江戸日本橋亭
三月二十日（月・祝）お江戸日本橋亭
四月月二九日（土・祝）紀尾井小ホール
五月二十日（土）お江戸日本橋亭
六月二十日（火）お江戸日本橋亭

正会員主催公演・研究会／依頼公演（＊印）

「ぎだゆう座初春公演」
一月七日（土）お江戸両国亭
「じょぎ」三月一・二日（百回記念公演）、五月一・二日　お江戸上野広小路亭
「ぎだゆう座」二月一・二日、四月一・二日、六月一・二日　お江戸上野広小路亭
「女流義太夫スペシャルライヴ vol.7」一月八日（日）・九日（月・祝）神楽坂ザ・グリー
「第三回弓弦葉の会」一月十五日（日）紀尾井小ホール
「第八回花のように香れ　女流義太夫」二月二十一日（土・祝）蕨市立文化ホールくるる＊
「第四十七回邦楽演奏会」二月二五日（土）国立劇場小劇場＊
「奈佐原文楽・女流義太夫共演会」三月二六日（日）鹿沼市民文化センター＊
「第十五回はなやぐらの会」四月十六日（日）紀尾井小ホール
「第一回瑠璃の会」四月二二日（土）大阪・御霊神社
「ひとみ座乙女文楽」五月三日（水・祝）四日（木・祝）ひとみ座アトリエ＊
「義太夫節演奏研究会　第二回研究成果報告会」五月二七日（土）京都市立芸術大学
「第九回花のように香れ女流義太夫」六月二五日（日）蕨市立文化ホールくるる

【普及】

義太夫協会主催教室／文化庁委託事業義太夫教室（会場：豊川稲荷文化会館）

◆義太夫・三味線一日体験教室
二月十八日（土）講師　竹本土佐恵・鶴澤弥栄
四月二二日（土）講師　竹本越京・鶴澤津賀榮
◆七十期入門コース（講義と実技）
五月二七日（土）～七月二二日（土）

【人材育成】

新人養成特別研修制度　在籍二年目一名研修中・五月より新規に一名研修中

【運営】

平成二八年度第四回理事会
三月十四日（火）日本橋永谷ビル会議室
平成二九年度第一回理事会
五月十五日（月）義太夫協会事務局
平成二九年度通常総会　五月二八日（日）
東劇ビル松竹（株）映像本部会議室

■今後の協会・正会員の予定■

平成二九年七月以降

【公演】

義太夫協会／義太夫節保存会主催公演

「女流義太夫演奏会」
七月十七日（月・祝）紀尾井小ホール
八月二十日（日）お江戸日本橋亭
九月二十日（水）お江戸日本橋亭
十月二一日（土）お江戸日本橋亭
十一月二十日（月）お江戸日本橋亭
十二月十六日（土）紀尾井小ホール
「本牧亭を聴く会」
九月八日（金）
日比谷図書文化館スタジオプラス

正会員主催公演

「じょぎ」七月一・二日、九月一・二日、十一月一・二日　お江戸上野広小路亭
「ぎだゆう座」八月一・二日、十月一・二日、十二月一・二日　お江戸上野広小路亭
「女流義太夫涙と笑い３」九月九日（土）
浅草公会堂第二集会室
「第十回竹本土佐恵の会」十月二八日（土）
内幸町ホール

公演等の詳しいご案内、最新情報は義太夫協会ｗｅｂサイトをご覧ください

【普及】

義太夫協会主催教室／文化庁委託事業義太夫教室（会場：豊川稲荷文化会館）

◆義太夫・三味線一日体験教室
八月二六日（土）講師　竹本越京・鶴澤津賀榮

◆七十期実践コース前期（実技）
九月九日（土）～十二月二三日（土）

―――――――――――――――――――――

文化庁主催「芸術文化による子供の育成事業－巡回公演事業－」（制作：古典空間）
「語ってみよう！義太夫節！」事前ワークショップと本公演
七月四日　松戸市立新松戸南小学校
九月二六日　杉並区立高井戸東小学校
　二七日　杉並区立泉南中学校
十月三日　秀明大学学校教師学部附属秀明八千代中学校
　四日　稲城市立第六中学校
　五日　練馬区立早宮小学校
　十二日　小平市立小平第七小学校
　十三日　杉並区立浜田山小学校
　二五日　茨城県立友部東特別支援学校

【人材育成】

新人養成特別研修制度
二名の研修を継続・新規研修生継続募集

【その他事業】

祖先祭　十月七日（土）回向院

【運営】

平成二九年度第二回理事会　十月中旬予定

■寄付・寄贈■

本年一月～六月までに左記のご寄付ご寄贈を頂戴いたしました。誠にありがとうございました。

六世豊竹湊太夫様（故人）　百万円
日本素義会様　五万円
鹿島和美様
　事務所移転のお祝いとして　五万円
石山岩男様（初代竹本綾之助ご遺族）一万円
宮下裕之様　荷物運搬用台車一台
河野哲丸様（河野国声様ご子息）
　新事務所用電話機一式
田村進一様
　女流義太夫演奏会演目出演者リスト一式
坂本久悦様（故豊竹湊太夫ご子息）
　床本・稽古本・写真・書籍・レコード等一式、本棚一式
渡部洋子様（鶴澤勝八師ご遺族）
　岡田道一（蝶花形）氏旧蔵スクラップブックの電子化一式

義太夫節床本・稽古本　譲渡会
九月十六日（土）十四～十七時
豊川稲荷文化会館三階
会員以外の方にもお譲りいたします。
会員は一割引となります。

平成29年度女流義太夫演奏会 公演日程（予定）

日　時	会 場	開演時間
7月17日（月・祝）	紀尾井小ホール	13時
8月20日（日）	お江戸日本橋亭	13時
9月20日（水）	お江戸日本橋亭	18時30分
10月21日（土）	お江戸日本橋亭	13時
11月20日（月）	お江戸日本橋亭	18時30分
12月16日（土）	紀尾井小ホール	13時
1月20日（土）	お江戸日本橋亭	13時
2月21日（水）	国立演芸場	18時30分
3月20日（火）	お江戸日本橋亭	18時30分

平成29年7月1日現在

会報編集委員／鶴澤寛也・竹本佳之助
鶴澤賀寿・竹本駒佳・竹本越里

義太夫用三味線・張替、水牛駒・見台・湯呑、制作修理　その他、各流三味線及び付属品の御注文承ります。

暑中お見舞い申し上げます

日本素義会

第107回　平成29年10月28日（土）開催
新加入 大歓迎！ふるってご参加ください
詳細は菅野昌行まで

義太夫協会オリジナル CD　最新作発売決定！

9 月 8 日（金）日比谷図書文化館スタジオプラス「本牧亭を聴く会 その 9」にて公開、
昭和 43 年 4 月 3 日本牧亭公演の記録音源をデジタル復刻。
女流では珍しい演目がいよいよ登場！

「ひらかな盛衰記　松右衛門内の段」

浄瑠璃　竹本弥周　三味線　鶴澤三生　　定価 1,500 円

＜義太夫協会記録音源 CD 各種好評発売中＞

壺坂観音霊験記・新版歌祭文・絵本太功記・御所桜堀河夜討・伊賀越道中双六・生写朝顔話・艶容女舞衣・義経千本桜・伊勢音頭恋寝刃・近頃河原達引

＊ご注文後 10 日前後でお届けいたします。詳しくは義太夫協会にお問い合わせください

永谷　暑中お見舞い申し上げます

永谷商事株式会社　代表取締役　永谷浩司

本社 〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 1-20-1　tel. 0422-21-1711

お江戸日本橋亭　お江戸上野広小路亭

お江戸両国亭　新宿永谷ホール

地域と共に歩む 不動産賃貸業

株式会社　オータカ

代表取締役　渡辺康成
常務取締役　高山早苗
専務取締役　渡辺貞稔

〒351-0011　埼玉県朝霞市本町 2-5-31
TEL 048-466-2220　FAX 048-466-2684